

寛容・協調からエゴ・対立の時代へ、高まる諍いリスク

— 日本の役割を世界に示すチャンス —

昨今の憂慮すべき状況に、多くの論評が満ち溢れており、それを繰り返すつもりはない。ハーバード大のマイケル・サンデル教授のいう「ポピュリズムの横行を批判するのではなくて、もっと根源的な問題にぶつかっている（日経 1/22 朝刊）」というのは真つ当な指摘であろう。民主主義の負の部分が大きくなってきたわけで、民主主義そのものは正常に機能している、とも言える。

富の偏在が、許容限界を超え初め、多くの国民が社会と政治に不満を募らせてきた、というのも事実であろう。これが民主主義の進んだ先進国に顕著に表れてきたところに問題の根は深い。しかし、問題を指摘するだけで、解決に向けての明確なシナリオを描き切れていない。

日本とて例外ではない。さらに日本には世界よりも顕著に抱えている課題も少なくない。

相手（国）に痛みを押し付けて、自分は苦しみから逃れよう、楽をしよう、力で押さえつけて覇権を握ろう、という態度の国もとくに大国で目立つ。長い目で見れば、結局は自国にも大きなマイナスではね返ってくるのだが、そこまで思いはせる余裕がない。自国の内部に問題を抱えているほど、この傾向が強まるのは政治家トップとして、残念ながら自然の姿ともいえる。敵を外に求め、内部の不満の目をそらす、やり方である。

軍拡競争に拍車がかかってきた。せつかく先人たちが長年かけてこつこつと軍縮や核拡散防止に向けて努力してきたことが、一瞬にして吹き飛ばうとしている。筆者が関わっているドローンの世界ニュースの抄訳配信でも、イギリスが発行する UASnews では軍事用途のドローンおよび、その対抗措置の開発が、世界各地で猛烈な勢いで開発競争が行われていることを取り上げている。ほんとうはこうしたニュースを配信したくなかった。どちらかといえば科学技術の悪用に嫌悪感を抱いていたが、最近そんなきれいごとでは済まされない、目をそらしてはならないことを痛感し始めた。

話は変わるが、地球規模の人類の大きな課題として、過酷さを増す自然災害頻発への対応問題がある。温暖化に起因するものは、長い目で見た人為災害といえるかもしれない。地球が（自然が、あるいは神が）、身勝手な人類に警告を発している、とみる人もいる。

筆者はそうは思わない。むしろ、(少々荒っぽいやり方ではあるが)人類に救いの手を差し伸べている、と解釈している。むかし、SF映画かなんかで、地球上のあちこちで争いが絶えなかったところに、宇宙のかなたから征服をめざして攻撃が加えられるようになり、地球人類は結束してその難局に立ち向かう、というストーリーがあった。ちまちました領土問題や覇権争いで、諍い合う(殺し合う)暇はないはずだ。

軍拡競争は、いったん向かい始めると際限なく拡大する。その行先は誰もが知るところである。日本はその流れに巻き込まれてはならない。それに従事する人が家族を含めて食っていかなければならない。自己

の存在価値を実感できる場が必要である。防衛と防災は、緊急出動、規範のとれた組織運営、体力・知力、危険な任務を整然とこなす訓練と勇気、・・・など、人の面から見るとかなりの部分が共通である。設備面や装備の面でも、共通するところが多い。平和になって仕事が無くなって、生活が成り立たないのでは困る。社会に役立っている、という使命感と達成感、危険な任務に携わるかわりに社会から尊敬され認められる、という社会のコンセンサス形成が何よりも重要である。

防衛と防災の人問題、組織運営についても、**被災先進国**としての強みを活かし、日本が世界に向けて模範にされるようになりたい。

こうした思いで、先の KojiMemo(30)を書いたのである。

[http://www.sparj.com/kojimemo/KojiMemo\(30\)Okinawa.pdf](http://www.sparj.com/kojimemo/KojiMemo(30)Okinawa.pdf)

現在、日本の抱える重要問題にひとつの方向性を提言するものである。

- 安全保障の考え方、
- 解決の糸口を見いだせない沖縄問題
- 防災・減災・縮災の体制構築強化
- 憲法改正の基本理念、「日本はどんな国になりたいのか」という基本問題

以上